

小説

安土城物語

2022年3月3日改稿

高橋和生

## 虎御前山の段（構想）

天正元年（1573年）8月28日 虎御前山の信長の館

信長は茶を飲みながら、座敷から思案氣に眼下の琵琶湖を見ています。自身も小谷城京極丸に登って浅井長政の最後を見届け、丹羽長秀、木下藤吉郎、大工・岡部又右衛門と共に虎御前山に戻ってきたところでした。

高さ200mの虎御前山は、高さ400mの小谷山の西にあり、前年8月に信長が浅井・朝倉勢に睨みを効かせるためにここに館城を築かせました。琵琶湖の向こうには元龜2年（1571年）9月に信長が焼きつくした比叡山が聳



え、その南に石山寺の伽藍が見てとれます。湖岸にそって目を手前に移すと、明智光秀を置いた坂本（大津）、暴れ川の勢田、元龜元年3月に相撲を興行した常楽寺の湊、六角氏の観音寺山城、丹羽長秀が居城する佐和山（彦根）と続き、東にそびえる伊吹山の麓には不破の関があります。美濃の国を見ることは、京が見えないと同様にできません。

「サル、3年に及ぶ戦いご苦労であった。越前の朝倉は討ったがその奥には上杉がいる。琵琶湖を押さえるため、そこに見える長浜に小谷の城下町を移し、城を築け。北近江三郡はサルに任せよう。城持ち大名になるのだ、名を改めるが良いぞ。」

「ありがたき幸せにございます。丹羽様の羽と柴田様の柴を頂き、羽柴と名乗らせていただきたいと思いますが、丹羽様、よろしいでしょうか。」

「おぬしは、どうも柴田殿とそりが悪いように見える。それゆえに良い名ではないか。ところで上様、入京5年、ようやく近江の国を押さえたように見えても、まだ六角氏は我々に矢を放ってきましよう。岐阜と京とは3日の道のりです。畿内を静まらせるには、兵を美濃から送り続けたいといけません、又右衛門に作らせた巨船は失敗でした。いかんせん足が遅い。やはり勢田には船橋でなく本格的な橋がいりませ。そして、近江の国の中心は長くあの観音寺山城でした。あそこに上様の城を築けば京に1日で行けます。近江の国人を新たに配下に加えるにも、上様の威容を示す城づくりをされてはいかがでしょうか。」

「丹羽には参る。ワシの思案をすっかり見通されている。義昭を放逐しワシが天下人となる以上、これからは京の天皇、公家の相手もせねばならぬ。さりとて、京に大軍は置けぬ。観音寺山の北に繋がる丘（100m）をなんとかするか。常楽寺湊の手前の山だ。内湖に囲まれており湖への守りも堅そうだな。」

「六角の弓衆が鍛錬する場から、アツチ（射場）と地元では呼ばれています。」

「思い出すのう。叔父の信安、弟の信行との争いも終わらせ、尾張下4郡の守護代になったと、足利義輝様にご挨拶に京に上ったのは14年前、26歳の時だった。美濃を避けて千種街道から中山道に出たのだが、中山道を見下ろす観音寺山の石垣の威容にとてつもなく驚いたものだ。今回、朝倉の一乗谷、この小谷城と見たが、改めて近江の国衆の石垣への執着を感じた。小牧城、岐阜城でワシも石造りを試みたが、石種の違いがあるのだろう。サル、石垣に詳しい国人を探し、抱えよ。」

岡部又右衛門は、口を挟むことはなく、（次は橋か。隧道を掘り、高樓を建て、船まで作ってきたが、上様はどんな城を想い描いているのか。）と、控えていると、

「又右衛門、アツチ山に石垣を組め、その上に100尺の高さの殿主を建てよ。京極丸で先ほど見た何倍もの規模でだ。あの丘でならできよう。山下には東山道を引き込み、一乗谷をしのぐ町を開け。3年だ。オヤジが死んだ42歳となれば、家督は信忠にゆずって、ワシはアツチ山に移るぞ。」

## アヅチ山頂の段（測量）

天正元年（1573年）9月1日 アヅチ山の山頂

岡部又右衛門は、画板に矢立を持って山頂に立っています。信長の指示を受けたあと、7月に佐和山で巨船を共に作った杣夫に鉈を持たせ、近在の百姓に鎌を持たせ、常楽寺湊からの尾根を、道を作りながら登ってきたのでした。又右衛門の視界を遮る木々を杣夫が叩き切り、息子の井俊が地縄をはっています。

「井俊よ、上様は100尺の殿主に住むと言われたが、山頂の地山を削るにしても、20間（40m）四方もないな。京で殿主となれば、1町（120m）四方の敷地が必要だが、切り盛りをして石垣を積んでも、左右にあと一か所ずつしか屋敷の敷地はとれない。そのさらに東となるとまた高くなるし、西は低くなる。上様はこれを見越して、塔のような背の高い殿主に住むと言われたのだろうか。信長様の殿主は山の如きものにならざるを得ないぞ。どのようにして作れば良いのか。100尺の高さだけなら、五重の塔も大仏殿も成しているが、何れも平屋建てだ。上様は、山頂に巨大な金閣を作れと言われたのだろうか。」

「父上、先ほど通った西の尾根ならわりと平です。20間×40間の敷地が取れましょう。まずはあちらを造成し、仮設小屋を建て、こちらの主郭が出来たのちに、西平に御殿を作られたらどうでしょうか。」

「西平か。上様はアヅチ山のテッペンに住むと言われた。上様が常々言われる天下布武の威容をアヅチ山で示したいのだ。配下の武家屋敷なら平山でも許されるだろうが。佐和山の杣衆よ。こちらが終わったら、西平の視野も開けるように諸所を打ち払ってください。」

井俊よ。山頂と西平との鞍部は谷となつて南にまっすぐに落ちている。小牧山で行ったように、数百の人数にソリに繋いだ太綱を持たせ、一息に山頂に荷揚するのに良いが、はたして下の沼は船が入れようか。」

「沼を掘らなくては、船を常楽寺湊からアヅチ山の南に回すことはできません。観音寺山からこちらアヅチ山までは、水田に沼です。荷車も渡ってこれません。沼の開削と合わせて、新道を作る事から行わいと、大工の出番はいつになる事か。父上、上様に言上しないといけません。」

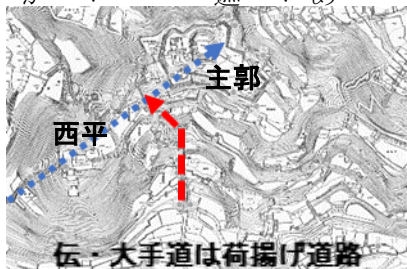
この後、9月24日から10月26日まで、信長は北伊勢、長島の一向一揆の征伐に向かうも叶いませんでした。又右衛門は常に信長の傍にいて、城攻めの為の隧道堀り、高楼建ての指揮をしていました。アヅチ山の測量の報告もその間にしていました。

「そうであるか。先日、蒲生賢秀が岐阜まで訪ねてきたが、未だ近江国人とは会えていない。蒲生に伝えるよう。ところで、殿主は3層50尺の高さにならざるを得ない狭い山頂だと言う事だが、おぬしの高楼建ての巧みさをもってすれば、100尺はできよう。11月には京に行く。一緒に金閣を見ようぞ。」

「松永久秀様が6年前に焼かれた東大寺金堂の高さは、100尺を優に超えていましたが、柱の胴回りは12尺（直径120センチ）であったと聞いております。高楼は城攻めの仮設ですので細い材で作っていますが、そのような大材を手に入れるのは難しくなっており、架構の工夫が要りましょう。」

「なに、3年後にアヅチ山へ移ればよい。松永弾正か。嫡男に家督を譲り、婆沙羅ぶって茶道具を集めているようだが、松永は多門城を作り、天主を載せたという、奈良も行かねばならぬな。」

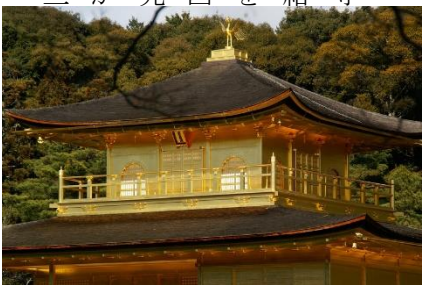
天正2年暮れになって、信長は領国に道路を作れと朱印状を出します。道路幅は3間半。



## 金閣、吉田社太元宮の段（企画設計）

天正元年（1573年）11月15日 金閣

信長は、京都奉行・村井貞勝、大工・岡部又右衛門を引き連れ、入明2回の天竜寺の策彦周長（1501年～1579年）を訪ね、夢窓疎石のなした天竜寺十境の結構を見たあと、策彦の弟子の南化玄興（1538年～1604年）の案内で金閣を拜見します。一層目は池に浮かぶ寝殿造りであり、二層目の潮音堂は観音像を四天王が囲み、天井には飛天が舞い、まさに舍利殿の様相です。しかし、三層目の究階頂に登ると、黒漆の床に黄金の壁・天井が写りこんでいますが、なにも像は置かれていません。170年を経て内部と違い外部の金貼りは傷んでいます。信長は三層目の金の勾欄に出て庭を見渡しながら、南化に聞きます。



「日本国王と名乗った足利義満の住まい、世を睥睨する三層の黄金の館なのだが、どうして最上階に何も置かれてないのだ。ワシはアヅチ山に天下布武を示す殿主を作ろうと思っている。教示願いたい。」

「上様、三層目は義満様が座禅を組む座禅堂です。明国では、儒仏不二、三教一致と言われ、天下を治めるものは、道教、儒教、仏教を自家のものとし、自らの悟りでもって事にあたれとされています。」

アヅチとならば、安土とするのがよろしいでしょう。平安樂土より平安の都が作られたように、二文字をとって安土です。湖（うみ）と伊賀・甲賀の山河を望む安土山こそ蓬萊三万里の仙境です。そこに須弥山上の善見城金殿玉楼に比するものをお建てなさい。されば、おのずと天下も治まりましょう。」

「又右衛門、聞いたか。おぬしの言う小山の如きワシの殿主の上には、金殿玉楼を頂くぞ。丹羽は近江の国を治める為に城造りが必要と言ったが、天下を正す天主を作るのだ。だが、屋根が柿葺きでは公家の住宅のようだ。弱いな。黒瓦を載せ、金で飾ろう。」

天正元年（1573年）11月16日 吉田社太元宮

信長は、昨日に続き、大工・岡部を引きつれて、京都奉行・村井貞勝とその配下の大工・池上五郎右衛門が待つ吉田社を訪ねます。神主の吉田兼和（1535～1610）が信長を出迎えます。

「この太元宮は、「唯一神道」を唱えた我が祖、吉田兼俱が創始したものです。伊勢の神霊が吉田社に移った証として建てられました。兼俱は、宋の儒学をはじめとして道教・仏教の理論を加え、「国常立尊」と言い、創造主である伊勢の神霊こそ宇宙の中核をなすものだ、ここに祀ったのです。」

「池上五郎右衛門か、武者小路のわが邸では世話になったな。この姿をどう思う。」

「八角円堂は、広隆寺、興福寺にもございますが、形の源流は聖徳太子を祀った飛鳥時代の法隆寺東院八角円堂だと伝えられています。宇宙の中核は円の形であると。暦応の火災（1342年）で燃えたのですが、白川天皇は高さ27丈（80m）の八角の塔を作られました。伊勢の大神ならば切り妻の茅葺きですので、太元宮は萱を八角円堂の上に入母屋風に葺いたのでしょう。」

「27丈とな。100尺など取るに足らん。安土山に殿主を作ると決めた。池上も京の大工を集めて欲し

い。それから、武者小路のわが邸は、そちがばらして安土に送ってくれ。安土山の仮住まいに使う。」  
「かしこまりました。昨日、村井様から安土山の話聞き、殿主の材の調達についてのお願いがございます。是非とも、上様のお力を材の調達にも頂きたいのです。京には、材木屋がおり既に製材されたものがあります。義昭様の二条御殿の折もそれゆえ14ヶ月で作れました。御殿の柱は8寸(24センチ)以下です。梁材は野物を使い製材されていません。」



しかしながら、安土山の小山の如き殿主、3層ともなると柱の太さは、胴回り6尺(直径60センチ)ほどは要りましようか。狂いを嫌って芯去り材とすると、胴回り18尺(直径180センチ)の大材となります。梁も床を張るために野物というわけにはいかず、形を整えなければなりません。」

殿主の形を決め(設計)材の数量を出し(見積もり)、新たな大材を探し求めなければなりません。大仏殿では、大材を求めて重源和尚は周防国まで行かれました。3年で作れとの事ですが、作事(建築)は、大工をかき集めれば2年で造れましようが、大材を探して乾燥させ、大鋸で製材するに1年半はかかります。安土山の普請(土木)は別にしてでございます。」

「馬鹿者!岡部から「100尺の殿主は出来ない。」と言って欲しいと言われたのか。」  
「上様、滅相もない。矢倉を建てた大船を2ヶ月半で作った岡部又右衛門です。何をおいても上様の命に従ってきました。池上様は我が父がお世話になった幕府御大工です。岡部の事を心配されてのことです。」

「わかった。やはり、安土山の棟梁は岡部でしょう。工夫もせずに、出来ない言い訳をするばかりの池上ではダメだ。しかし、聞くほどによく建築を知っているのは間違いない。岡部を助けてやってくれ。大材を毛利の国に求める事などできはしない。近江で手に入る材で作る事を岡部は考えてくれ。」

## 湖上の段(造成の手配)

天正元年(1573年) 12月1日 常楽寺湊

信長は坂本から早船を使い常楽寺湊に着く。御座船が用意されており、船の前では、蒲生賢秀、山岡景隆、木村高重、西尾義次、小沢六郎三郎、吉田平内、大西某と、近江の国人がそろって控えています。

「蒲生賢秀、ごころうであった。寒いから御座船に入ろう。丹羽長秀から聞いておろうが、この安土山に高さ100尺の殿主を作ると決めた。ついては、この地に昔より住む皆の衆に普請奉行を務めてもらいたい。これから御座船は安土山を回る。ゆるりと見ようぞ。」

見えるか。まずは、この西からの尾根筋の上り道と、南から谷を登る荷揚げの道を作り、木を切って山肌を明らかにし、ワシの指示で大工・岡部に敷地の地縄を張らせる。ここまでは人足仕事であるので蒲生は一人でできるといのだが、大工が、材木、石垣の石の調達は近江の国衆が分担しないとできないと言うので皆が集まってもらった。また、安土山への新道も必要だ。その際、勢田川には本格的な橋もかけたい。」

「私、蒲生が湖南を、山岡が湖西の山を見、材運び出す川の算段をし、柚をいれます。石の切り出しと安土への運び込みは、西尾、小沢、吉田、大西の4人が分担して行います。木村高重殿は、この地の旧家であるだけでなく、明から渡来した最新の算盤術も使われます。刀槍の戦働きなら賢秀は負けません。数字を操つるのは苦手でして、木村殿には、我々近江の国人の勘定奉行を務めていただきたく所存です。」  
「あい、わかった。」信長はめずらしく上機嫌で、「いつまでにできるか。」との詰問はされませんでした。

## 多門城の段（先例を見る）

天正2年（1574年）3月27日 多門城

天正元年12月26日、松永久秀、松永久道が多門城を信長に明け渡し降参した。あくる正月8日には久秀自身が岐阜に来て名刀を信長に送る。今回は、朝廷に願い出て「蘭奢待」を東大寺に切らせることを認めさせたので、奈良に信長自らの威光を示すために、塙直政、菅谷長頼、佐久間信盛、柴田勝家、丹羽長秀、蜂谷頼隆、荒木村重、武井夕庵、松井有閑、織田信澄の武将を引きつれて多門城に入った。南東に東大寺、南に興福寺をそれぞれ眼下に見る要地に位置し、大和支配の拠点として城は作られていた。

河原の丸い石で石垣を作り、墨上には後に多門櫓と名がつけられた長屋の櫓が築かれていた。殿主、会所、庫裏などが庭園を囲んであった。久秀は2階建ての御殿に住み「楊貴妃の間」があった。西には家臣団の屋敷があった。狩野派の絵に飾られた座敷と共に、水屋のついた茶室もあった。（島津家久の日記）

「又右衛門よ。天主があるというので期待して来たが、あれは物見矢倉ではないか。ワシが二条の義昭邸で門の横に2層の天主を作らせたので、それをさらに2層積み上げ4層にしただけだ。それより、座敷飾りが良いぞ。金工細工、畳、棚飾り、とりわけ襖絵が良い。さすが、婆沙羅大名と言われるだけの事がある。京に戻ったら、狩野なる者の工房を訪ねよう。ワシは大仏殿の焼け跡を見て帰るが、岡部は奈良大工を訪ね、これはという者がいたら安土城の為に抱えよ。これだけの大寺があるのだから、大工もいよう。」

信長は狩野永徳の工房を訪ね、將軍義輝が永徳に描かせてそのままになっていた洛中洛外図屏風を見て、大胆な水墨画だけでなく大和絵の細やかさもわが物としている永徳の技量に驚きました。上杉謙信に贈られるものだったと聞き、金5枚で買い上げ、信長が上杉に贈る事としました。

## 法隆寺の段（基本設計）

天正2年（1574年）4月1日 法隆寺夢殿

大工・岡部は、東大寺の転害門、南大門、二月堂、三月堂を見てまわり、隣の興福寺を見て、薬師寺の東塔、唐招提寺の伽藍を見て回るのに、3日を要してしまいました。法隆寺大工の中井正吉（1533〜1609年）を訪ね、法隆寺大工の作務衣と法被を着て、西院の建物を順に回り、今は東院の夢殿の中にいます。正吉の息子、正清（1565〜1619）9歳も、父親について回りました。

「正吉殿、誠にかたじけない。天平時代の夢殿の架構は吉田社の太元宮とは全く違いました。これで、安土山天主の5階八角、6階四角の形が決まりました。

飛鳥時代の金堂、五重の塔から、平安時代の大講堂、鎌倉時代の西円堂、聖霊院と見させていただきましたが、木割が細くなるのが、木造建築の歴史だとはつきりわかりました。西院伽藍の南方、境内入口にたつ入母屋造の一重 南大門、あの小ささでもって、あの木割の太さ。地震に耐えるなんという事は考えていません。門構え以外のなものでもないです。しかし、今の時代、このような太い材が手に入らない中で、上様は100尺の殿主を作れと私に命じたのです。3階



建ての殿主、その上の小屋裏と石垣内の穴倉を含めて、この5層をいかに組むか悩んでいます。」

「白蟻にやられたので柱を替えたのですが、古材は再利用しています。ヤリ鉋で研ぐと、プーンと檜の香りが立つのです。口伝では千年かけて育ったヒノキは千年もつと言われており、頂いた命は大切にしています。このような太い材であることにこしたことはありませんが、近江の国で手に入るものでしか作れないなら、大材はないものとして、柱は芯去り材を集めて鉄輪で巻くとか、東大寺南大門のように貫きで細い柱を繋ぐ大仏様とし、全体でもつようにするとか。だれも、殿主を3層も積みかさねて作った事はないので、10分の1の大きな雛形を丁寧に作り、ゆすってみて、確かめるしか手はないでしょう。」

「正吉殿、是非、安土山に来て、私を助けていただきたい。」

「承知しました。是非、お願いします。安土山天主がどのように形になるのか。天下無双の話を岡部殿から伺い、大工の血が騒ぎます。息子の正清もつれて行きます。こいつには、大工・中井家の未来を見てもらわないといけません。」

中井正吉は、後に豊臣秀吉の大坂城、方広寺を作り、息子の中井正清は徳川家康の六本槍となり、大坂城攻めで働き、二条城、江戸城、駿府城、名古屋城を作りました。大工・中井家の未来をまさに作った大工（建築家）になったのでした。大工（建築家）はパトロンを捕まえないと、なにも作れません。

### 安土山頂の段（敷地の確定）

天正3年3月1日 安土山山頂

信長は昨夜泊まった佐和山の丹羽長秀を引きつれ山頂を目指しています。木村高重、岡部又右衛門親子はそれに気づくことなく、近在の百姓をつかって杣夫の残した根を掘りださせ、造成を指揮しています。

天正二年3月以降の信長は相変わらず忙しい。4月3日に石山寺が蜂起、5月5日賀茂祭、京都5月28日、6月14日、6月21日柴田勝頼が高天神城を落としたので吉田まで出陣、7月13日、9月29日長島攻撃。

6月から9月の信長の出陣では、近江の国衆も出陣し、天正二年から分担して安土山の準備工事をするはずが、止まっていたのでした。岡部又右衛門も長島攻撃に参加しており、安土山に入れたのは10月の末でした。杣夫を使って木を伐り、安土山を裸にはしていましたが、木杭を打って、斜面の切り盛りをし、砂利を敷いて敷地の造成となると、岡部又右衛門が指揮しない事には出来ません。

「又右衛門、敷地ができていっているのではないか。丹羽、見よ。山下の3間半幅の道路も完成したぞ。」

「あつ、これは上様、それに丹羽様まで。苦勞様でございます。西平と頂上の敷地の形にメドをつけようと木村様と励んでおります。あと半年で、虎御前山上様が話されてから丸3年たちます。」

「42歳になってしもうたが、ワシの歳のことなど、武田も坊主も気にしてくれんからな。おぬしにももうひと働きしてもらい、武田勝頼を潰さんことには、信忠に家督も譲れんわ。今、その為に堺に鉄砲を頼んでいる。ところで、この一番高いところだな、殿主は。固そうな地山でないか。20間×20間か。」

「穴太衆（石垣積の専門集団）と打ちあわせ出来るように、杭を打ち、水引（水平を取る事）をこれからするとありますが、南の段からここまで31尺あります。この地山の上さらに穴倉階分の13尺を足して44

尺の石垣を積みますと、17間×17間と減ります。ただし、地山の形に合わせて穴太衆は積みますので、<sup>8</sup>彼らが地山を掘って根石を置くまでは石垣の形は見えません。私は六角形になるのではないかと思っています。」

「そりゃ、大工として難儀なことだな。池上ではできんぞ。」

そこに、井俊が大きな箱を抱えて現れる。

「上様、雛形を井俊が作りましたで、見てやってください。天主です。最上階の6階は金閣、5階は太元宮です。上様と共に京、奈良をまわり、形を決めました。いかがですか。」

「ウン、ワシが設計したのだからな。いいぞ。しかし、雛形は、天主を載せる大屋根までしか作っていないのはなぜだ。おぬしは、殿主は3階建て高さ50尺になると言っていたではないか。」

「はい、上様がお住まいになる3階の上、4階はこの大屋根の中になります。この4階以上の雛形の高さは55尺あります。従って、石垣の上から105尺の高さになります。上様ご指示の高さ100尺となる5階6階を検討するための雛形でした。」

「すると、石垣の形も決まらないので、1階〜3階の雛形が作れないと言う事か。なんだ、木村。何か言いたそうなんだな。」

「上様から、木材は近江で探せとのことでした。岡部殿は、胴回り15尺（直径150センチ）を求められているのですが、湖西、湖南は、石山寺、比叡山が大木を既に採っておりありませんでした。岡部殿は芯去り材でないと狂うからダメだといわれるので、湖北の朽木、若狭の神宮寺山に入って探しています。」

「そうか、石垣だけでなく、材木の質と量を見ないと、1階〜3階の雛形は出来ないという事か。木村高重、おぬしの働きぶりは丹羽からも聞いています。めでたい事だ。」

「勢田の橋ですが、今年の7月には立柱ができそうなので、10月には完成させるつもりです。こちらは芯あり材ですので、調達は既にすんでいます。」

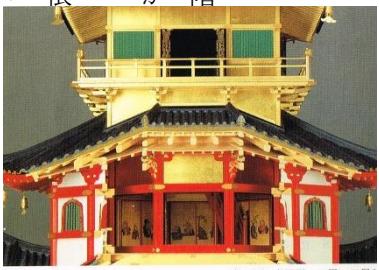
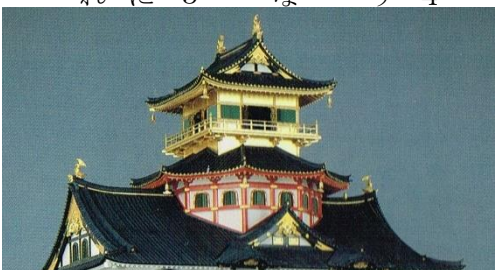
「いや、重ねてご苦労であった。今晚、報償をとらずぞ。そちの城は永原であったな。今晚は高木の城に泊まろう。丹羽、岡部も付き合え。」

### 佐久間邸の段（プリゼンテーション）

天正3年12月1日 佐久間信盛の館

広間中央には、白絹を被せた高さ3mの安土山天主の雛形が置かれています。その脇に座すのは大工・岡部又右衛門。その下手には、御大工・池上五郎右衛門、奈良大工・中井正吉が控えています。3人とも緊張した面立ちで信長を待っています。

信長は5月に長篠の戦いで武田勝頼を破り、8月には加賀・越前を平定し、10月には一旦ではあります。石山寺との和議が整い、11月には権大納言になりました。嫡男信忠も秋田城介に任じられたので、頃合いよしと、かねてから考えていたように、オヤジ信秀が亡くなった歳42歳であるうちに家督を信忠に譲りました。当時は正月が来ると歳が増えました。11月28日、信長は、茶道具だけを持って佐久間信盛



安土城天主堂型 四層・五層  
（安土町城郭資料館）



の館に移ったのでした。大工たちは、12月1日に岐阜城で皆にお披露目せよと信長から指示があり、準備をしてきたのですが、突然の家督の移譲に何があったのか、これから何かあるのか、不安を抱えて信長を待っています。信長は、丹羽長秀だけを引きつけて登場します。

「ご苦労であった。家督を譲ったものが、天下布武を示す天主を安土山に築き、三国一の桃源郷にするなどと言おうものなら、美濃、尾張の武将たちを束ねる信忠の立ち位置を悪くすると考えて、こうしてまずは内々にした。今日の来る日をワシは楽しみにしていたぞ。城造りは、丹羽を総奉行にし、ワシが馬廻り、弓衆、小姓を使い、直接指揮をする。信忠の手は借りない。信忠には、現地で安土山の全容が見えた時に、岡部からまた説明をして欲しい。まず、日程である。いつ、安土山にワシは移れるか。」

「武者小路の館は、ばらされて常楽寺にあります。3ヶ月もあれば、2月末には西平にできましょう。」  
「いつ天守は完成するか。石垣に1年、建築で2年、3年後、天正7年の正月にはできようか。」

「金工、濃絵もございますが、天主だけなら1年半、再来年天正5年6月に立柱できれば天正7年正月にできます。問題は石垣です。石奉行がそれぞれの地で石の山を作って貯めています。それを山頂にあげ、積み上げるのは、全くの人足仕事です。馬廻り、小姓だけでは到底できません。人足を集めないといけません。」

「あいわかった。ワシが安土山におれば、武将たちの足軽も呼べよう。いや、武将にも石揚げの指揮をさせよう。滝川一益、羽柴秀吉など、張り切るぞ。丹羽、来年の3月に、人足1万人を集めよ。よし、早く、白絹をとって見せてくれ。高さ10尺の雛形だから、十分の一か。」

池上と中井とで、白絹を丁寧に取る。雛形は二つに割れるように作られていた。まっ二つに割った断面が見えるように置きなおされた。信長は立ち上がり、雛形の周囲をゆつくりと回る。



安土城天主雛型東～西 断面 (安土町城郭資料館)

「善見城金殿玉楼とは、まさにこれだ。中央が大きく割れており、下に宝塔があるのか。岡部の自信作、荒子観音の多宝塔をワシは覚えておるぞ。」

「天下、宇宙の中心となれば、法華経の言う大地から湧き上がる力です。殿主の中心に置きました。」

「ウム、それで、このカラツポのところはなんだ。2階に舞台、3階に橋がある。禅林十境か。」

「ここが、岡部の苦心したところです。」

第一に、上様がお住まいになるに、3階は良いですが、2階、1階となると中央部には光は届きません。従って要らないところだと、カラツポにしました。風は通ります。

第二に、カラツポを、4間×6間×高さ8間の吹き抜け架構としました。幸い、長さ8間、1尺5寸の柱材がそろいました。当初はより大きな大材をもとめたのですが、芯去りの均一な材を活用して、高檣を先に組み、大仏様で固め、架構全体を心柱とします。

第三に、中央にこれを組めば、四方それぞれに大工を配し、競わせて組むことができ、工事が早くなります。

第四に、カラツポにしたので、殿主中央部が軽く、地震の力を流します。上様、押してみてください。

第五に、吹き抜け架構の中に、足場、ろくろと滑車、を据えて、資材の搬入に使います。これも工事が早くなる工夫です。

第六に、3階では上様の専用の通路として中央に橋、周囲に勾欄をまわしました。2階では吹き抜け架構を殿主の中庭に見立てて客座敷に向かう舞台を置きました。吹き抜け架構を活用する道具立てです。」

「なんとということだ。岡部又右衛門は日本一の大工だ。」

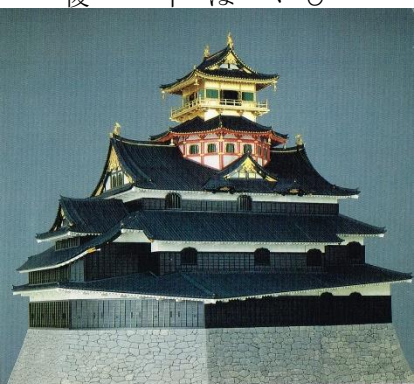
池上と中井は、雛形を元にもどした。こんどは外観の説明である。

「穴太衆との打ち合わせにより、石垣は変則的な八角形となります。前に上様に見ていただいた天主6階と5階は、8間×10間の長方形の母屋の中央に乗せませす。

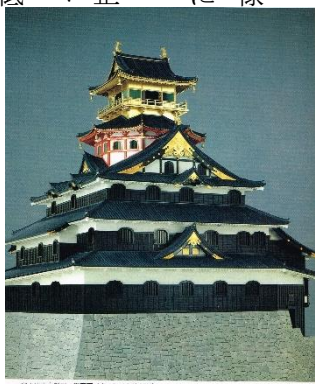
1階は、石垣に合わせて八角形ですので、そこをどうつなぐかですが、南を正面として、1階から2階で一間壁を下げ、2階から3階でまた一間壁を下げ、屋根が上に乗ることに、上の屋根を小さくしていきます。このような屋根の低減は、御堂、5重の塔に見られるように、安定した美しさをもたらせるものと、古来行われていることです。

湖上からの見栄えも大切と上様からありましたが、石垣が地山によって伸びざるを得ないと穴太衆が言うので、縫破風をその石垣を中心にして北に流し、千鳥破風を置きました。古来「真、行、草」とございますが、天主と千鳥とは芯がずれる「行」です。1階は現場合わせで、軒先が斜めになります。山下からは見えないので、仕事がしやすく、雨漏りがしない形を優先しました。」

「めでたい、めでたい。池上、中井、そちたちの助けがあつての岡部だ。今後とも頼むぞ。」



安土城天主御堂 西南面 (安土町城館資料館)



安土城天主御堂 東面 (安土町城館資料館)

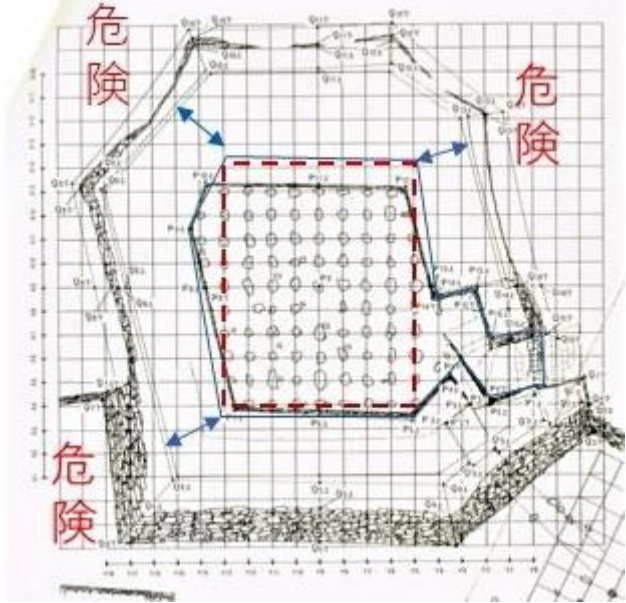
## 妙覚寺の段（設計変更）

天正4年5月3日、信長は京の宿、妙覚寺にいる。大工・岡部からの手紙に返事を書くところ。

天正4年2月23日に信長は安土山の御殿に移ります。供は馬まわり衆、弓衆、小姓と信長の親衛隊だけでした。4月1日から石垣を積み始めます。まずは、天主の石垣です。尾張、美濃、伊勢、三河、越前、若狭、畿内の諸侍、京、奈良、堺の職人を安土山に集めよと信長は指示を出します。瓦は唐一観が、奈良の瓦職人を安土に呼んで焼かせることになりました。石材の山への引き上げは、人足1万人を集め、昼夜、山も谷も動くかと思われるほどの大騒ぎでした。信長は、天主・主郭の石垣の根石を自らの眼で確認した後、4月29日に京に上り、二条の関白義春廢邸の庭を気に入り、ここに信長の二条新邸を作れと村井貞勝に命じました。安土山は「天下布武」の殿主ですが、京では、天皇・公家と付き合う為に、「権大納言」という貴族を装おわれないといけません。日本庭園など安土山では望めませんので、こちらはこちらで信長は作事を楽しんだ事でしょう。4月14日に石山寺が挙兵をし、荒木村重、細川藤孝、明智光秀、原田直政が既に動いていたのですが、信長は京のままです。手紙を書いた後、信長軍が負けた事を知り、5月5日、わずか百騎を率いて大阪に向かいます。相もかわらず忙しい中で安土築城でありました。

「上様、岡部又右衛門です。根石は上様確認のように、変則八角形で積み始めたのですが、現在天主の地山まで組み上げたところで、穴太衆から「母屋の8間×10間を石垣の内部に入れることはできない。8間×9間にならざるを得ない。」と申し出されました。上様も問題だと把握されていた北側の石垣ですが、地山の傾きに合わせ、石垣の内側にゴロタ石を入れながら石積を登らしてきたのですが、傾きが緩くなり、石垣の天端が南によってきたのでした。結果、北東と北西の石垣が危険となり、一間分、北の石垣が南に寄るとの事で、穴倉階は8間×9間にならざるを得ないとの事。この理屈は岡部も納得しました。解決策は石垣の高さを2間 $\parallel$ 14尺減らせれば簡単ですが、それでは上様に怒られます。私は南に1間寄せようかと思えます。説明させていただいた、南側の屋根の低減ができませんが、高さは保持できます。」

信長は雛形と、現地を思い出し書いた。



「岡部 高さを減ずるのは問題外だが、おぬしのいう南の屋根の低減をヤメルのもダメだ。8間×9間と、穴太衆に言われるがまま、母屋を減らすのでなく、工夫せよ。岡部は日本一の大工だ。しばらく、ワシは安土山には戻れないが工夫がつかないならワシが安土山に戻るまで工事を止めておけ。」

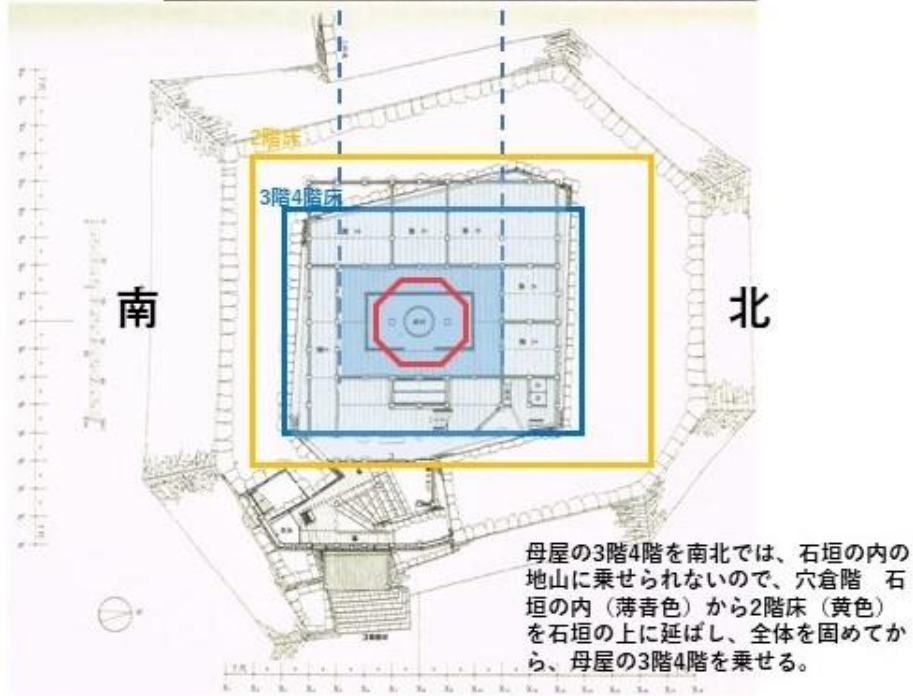
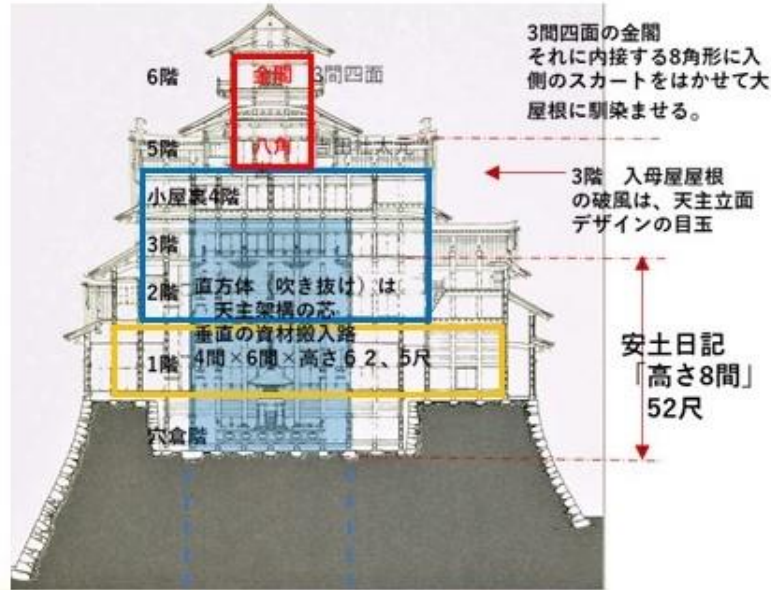
## 再び安土山山頂の段（実施設計の承認）

天正4年6月8日、信長と大工・岡部又右衛門は安土山山頂で対峙しています。

信長は5月5日から大坂の合戦に参加するも、6月5日に戦線を離れる。6日に宇治により、この地を井戸良広に与え、二条の妙覚寺に帰郷し、翌々日8日安土山に戻ります。早速、安土山の天守台に向かい、一ヶ月止めていた石垣の出来高を見ます。

「岡部、おぬしの考えは？」

「上様、8間×10間でなく、8間×11間と母屋を延ばし、南北共に母屋の一柱列を石垣の上に載せた



らどうかと考えました。母屋は地山に乗せたかったのですが、やむを得ません。1〜2階の架構を先に固めて石垣上での安定を図ってから、上階に架構を延ばします。天主の5階、6階は、母屋の中央に乗りませんが、南北から見る姿ではそのズレはわからないと考えました。」

「あいわかった。建物がさらに大きくなるのは良い。戦場でそちがいつも作る高櫓を天守台に組み、縄を張り、布をたらせ、ワシが湖上の船から、街道から見ている。」

6月12日に現地での原寸での試験がなされ、信長の承認を得て、岡部は改めて雛形をなおし、7月1日に信長の実施設計変更の承認を得たのでした。

## 安土山天守台の段（立柱）

天正5年8月24日 安土山天守台

大工・岡部又右衛門は、組み上げた4間×6間×高さ8間の吹き抜け架構の上に立ち、湖上からの風を体全体で受け、信長に向かって「やりますぞ！」と拳をあげ、叫んだのです。

天正5年11月3日 信長は、屋根ふき合わせ（天主の骨組みの完成）を確認して、14日に上洛し、二条の信長の新邸に入りました。

つづく。



安土山島観図 近江八幡市 作絵